

中山尚夫編

八十返舎一九集 6 V

怪物輿論

付、田舎草紙・滑稽臍栗毛

古典文庫

中山尚夫編

八十返舎一九集 6 V

怪物輿論

付、田舎草紙・滑稽臍栗毛

古典文庫

古典文庫四九七冊

昭和六十三年三月二十日発行

非売品

編者 中山尚夫
なかやま ひさお

発行者 吉田幸一

怪物輿論
＜一九集 6＞

印刷者 共立印刷株式会社

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九一四五九七番

目次

凡例	三
怪物輿論 卷之一	五
怪物輿論 卷之二	二七
怪物輿論 卷之三	四三
怪物輿論 卷之四	六一
怪物輿論 卷之五	七九
田舎草紙 卷之一	九七
田舎草紙 卷之二	一二七

田舎草紙	卷之三	一三七
田舎草紙	卷之四	一六二
田舎草紙	卷之五	一八一
滑稽臍栗毛	上	二〇三
滑稽臍栗毛	下	二五一
解 說		三〇五

凡 例

一、本書は十返舎一九の作品中から、『怪物輿論』（底本、東洋大学図書館蔵）、『田舎草紙』（底本、東洋大学図書館蔵）、『滑稽躰栗毛』（底本、蓬左文庫蔵）を全文翻刻した。

一、翻刻にあたっては、できる限り原文に忠実であることを心がけたが、

(イ) 宛字・誤字

(ロ) 仮名遣いの誤・振り仮名の誤（例、難^{たん}）・送り仮名の不足（例、脳され）

または余り・清濁

(ハ) 振り仮名・踊り字・割り書き・句読点

等はすべて底本のままとした。

一、漢字は原則として底本のままとしたが、現行活字にない異体文字は、正字に改めたものもある。（例、僅↓並）

一、『滑稽躰栗毛』の文中の会話における話者の名は、原本では

権七

子たね

とあるが、本書では『権七』『子たね』の記号に改めた。

一、底本の丁移りは、その丁の表および裏の末尾を示すことにし、数字表記は、底本の丁附けにしたがった。

一、原文には一篇中、文の途中での改行はほとんどないが、組版の都合上、適宜丁移り箇所で改行した所がある。

一、挿絵・広告文も総て底本のまま収めた。

一、終りに、本書を成すにあたり、御蔵本の翻刻掲載を御許可下された東洋大学図書館、蓬左文庫に対し、深謝申上げる。

昭和六十二年八月

中山尚夫

怪物輿論
一

怪物輿論叙

無情むじやうにして。有情うじやうに化くはするものは。腐艸ふさうけ化して螢はたるとなるの類たぐひ。離形りけいにして有形うけいをなすものハ。折枝おりえだを地ちにさすに。自根おのづからねつくが如ごとし。況いはんや人の冤氣こんき(序一オ)存ぞんして。異形いぎやうを露あらし靈れいをなす事。各物おのづものに着ちやくするの情逼こゝろひつする故也ゆへ。蓋山けだしさん谷幽陰こくゆういんの猿精えんせい狐怪こくへい。古家こかく荒房へうばうの怨鬼えんき愁冤しうこん。俱ともに奇きとすべく。亦奇またきとすべからざるもの也。(序一ウ)依よつて今新いまあらたに。其その怪くへいを索もとむるにあらず。需もとめずして諸書しよしよに靈異れいいの證狀しやうくわうあるを。盡ことごとくく拾鳩しうきうし。命なづけて怪物輿論くへいぶつろんとなすものならし(序二オ)

維時享和三亥春三月

東武

橘街逸民

十返齊一九誌

敬	貞
之	印

(序二ウ)

怪物輿論綱目

卷之壹

齊さい念ねん成えん二 魔ま鬼き一 全ぜん二 私ひく怨はな話なし

卷之二

妖よう火く護へりん二 悋ちの持ほう方きん金を一 話まもるはなし

卷之三

狗いぬ靈の変れいかレ 形たちを陷へん二 両じてり子やうし一 話をくらふはなし

卷之四

轆ろく轤ろ首く悌び念が却きねん却か報へつてレ 福さいわい話をむくふはなし

卷之五

(序三才)

岩いは倉くら少のせう女ぢよ遍ゐん淫よく慾にせま一つ成て鬼き話となるはなし

目 録 終

(序三ウ)

怪物輿論卷之一

十返舎一九編

齊念成魔鬼全私怨話

駿河の国菴原の片邊に。靈岩寺といへる化城あり。往時今川家尊信そんしん歸き伏の靈像を安置して。尤安富尊榮の地なりけるが。今ハはや纔に舊蹤の名のミ残り。唯一草扉の中にして。住持齊念ミづから旦家に鉄鉢てつぱつ（二ノ一オ）を捧て修行し。旦にハ星を戴き。澗水を汲て米をかしき。夕にハ月を負ふて薪こり柴を刈て持歸り。漸く露命を完くし。年頃檢約を守り。質素堅硬にして。その塵を積埃を集めて。終に過當の金錢きんせんを恪持せり。然るに此齊念性質淫色さいねんせいしつゐんしよくの意深く。同邑の浪士。飯尾与

惣といへるものゝ養女お種に。恍惚の心を生じ。執心（一ノ一ウ）

の餘り。累年膏血を絞（しぼ）りて。貯溜（たくはへ）たる金銭を惜まず与惣に與へて。

養女お種を庵中に引入れ。人しれず房間に深く隠置（かくしおき）て。日夜この愛

情に縛（ばく）せられ。忽持戒の要（よう）を忘れ。信念（しんねん）を違格（みぎやく）し。勤行（ごんぎやう）を懈怠（けだ）し

て。遂に破戒無慚（はかいむざん）の佛罰（ぶつばち）を犯すにいたる。去ほどにお種ハはからず

も。父与惣が許若（そこばく）の金銀（きんぎん）を。惠投（ゑとう）に遭（あひ）たる（一ノ二オ）事なれば。今更（いまさら）

奈何（いかん）ともなしがたく。仮（かり）に身を任せ。齋念（さいねん）に契（ちぎ）るといへ共。敢（あへて）而（き）

霍（く）の思ひにあらず。其上（ちうや）昼夜齋念（ごういん）が邀淫（なやま）に腦（な）され。堪（たへ）匡（が）くやありけん。

或（ある）夜暇隙（やかげき）あるを幸（さい）ひ。草庵（さうあん）を忍（しの）び出。宿所（しゆくしょ）に遁（か）れ歸（かへ）りければ。齋念女

の見へざるに懈轉（けでん）して。徑（たゞち）に与惣が方（かた）に至（いた）り。其在（あり）所（しよ）を索（もと）むに。早く

も匿（かく）して詳（つまびら）かに言（い）されば。頑（ぐ）心（はんしん）遲鈍（ちどん）の（一ノ二ウ）齋念終（つゐ）に一心癡狂（てんけう）し

て。近郷きんごうに狂くるひ出。曾かつて穀食こくしょくを断。次第しだいに渾身こんしん瘦弱そうじやくし。氣力きりよく勞つかれて今ハたゞ庵中あんちゆうに臥轉ふしまろび。既に命いのちも絶たへなんとするにいたつて。稍頭やまかしらをもたげ傍人ほうじんに向つていふ。我不期ごにして色慾しきよくの為ために仏恩ぶつおんを廃はいし奉り。惡縁あくえんに導もちびかれて生涯しやうがいを愆あやまつ事じうぜん從前あやまちの過くゆを悔せんるとも詮なし。然しかりといへ共奈何いかなる宿世しゆくせの業因ごういんにや。今いまの際きへに至いたる（一ノ三オ）

挿絵第一図（一ノ三ウ・一ノ四オ） 一九画

までは是だんりを断理する事なし。望ねがへくハ終臨しうりんの思おもひ出に。今一度養女お種むねに面會めんくわいなさバ。却かへつて迷惑めいわくの念おもひもはれん。さなき時ハ愈いよく遺感いかんの情じやうに逼せまつて。死後しごじやう成佛ふつに帰きせん亘固かたかるべし。あはれ与惣いそに是これを示しし。其事ことをなさしめたまへ。さあらバ我千載せんざいの命いのち一遇いちぐうにかへて得道とくだうすべしと。双眼さうがんに泪なみだを流ながし。戚々せきくと語出かたりるにぞ。農夫のうふ何某枕上なにがしちんしやうに跪座きざ（一ノ四ウ）
うつくまる



第一図（一ノ三ウ）